

デ・レーケ と富山

デ・レーケは、南アフリカのトランスヴァール共和国(1852年にボーア人が建国し、20世紀初めまで存在した国)へ行って働く事を望んだが、結局行く事はできなかつた。また、彼は上海で働くことも考えていたという。「日本の川を甦らせた技師デ・レーケ」(上林好之著・草思社)からそのいきさつを見てみよう。

1840年代、阿片戦争のあと、南京条約で清国はイギリスに香港を割譲するほか、広州、上海など5つの港を開港することに合意。それ以来、列国は上海の黄浦江沿い(こうほく)につぎつぎと租界(そがい)・居留地(こうりゅうち)を建

設し、上海は中国一の商都に発展。入港する船舶は大型化していたが、黄浦江(こうほく)の水深は浅くなっていた。

黄浦江(こうほく)は、揚子江の最下流部の右岸に合流する支川。その河口から約20キロ上流の左岸に上海の市街地がある。河川勾配がゆるく、上げ潮のときには揚子江の砂が大量に上流までさかのぼり、引き潮の時は、流速が遅いためにその砂が沈殿し、川のいたるところが砂州となつて舟運をさまたげていた。

さまざまな紆余曲折を経て、1905年9月27日、デ・レーケはついに黄浦江管理委員会の技師長に選任された。そして、日本の九頭竜川、淀川、木曾三川、常願寺川での豊富な経験を生かし、引き潮時の流速が速くなるような適切な川幅の新河道を掘削して、いままでに堆積した土砂も流してしまふという優れた計画案を作成し、

委員会から全幅の信頼を得た。改修工事は順調に推移したが、中国の財政が未曾有の混乱状態になり、総工事費を支出できないと言いつつ出した。こうしたごたごたの中で、デ・レーケは技師長を辞任する決意を固め、1910(明治43)年11月には辞任した。上海が現在、世界の重要な貿易港として、また中国の商都として繁栄を遂げているのは、デ・レーケという無名ではあるが独創的な水工技術者がいたからであると上林氏は強調する。

1911(明治44)年1月17日、オランダに帰国したばかりのデ・レーケに、オランダ女王から勲爵位(ライデル)が贈られた。

それから2年後、1913(大正2)年1月20日、永眠。人一倍の努力と勤勉さで、片田舎の築堤職人の息子から世界的な技術者に駆け上がった人生であった。(終) ㊦